

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32640

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370112

研究課題名(和文)「言語/形象」関係論のための、制作手法に即した河原温研究

研究課題名(英文) The Research on On Kawara as the Relation between Language &amp; Image -- in line with his method of the work

研究代表者

平出 隆 (HIRAIDE, Takashi)

多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：90407825

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、概念芸術の世界的な作家である河原温について、その作品を制作手法に即して解明する研究としてスタートした。しかし、「作者の生身」の露頭を拒みつづけた作家の死によって、研究状況は一変した。新しい解釈による大回顧展や特異な展示が開催され、さらには遺族や友人たちによる資料や証言の開示が始まったからである。

本研究は、人類にとっての言語と形象の関係を究明するという視点を持ちつつ、書物形態とはなにか、郵便とはなにか、創造とはなにかを実践的に検討する。そうすることで、作家が行なった探究の現場に多角的に迫ろうとしている。

研究成果の概要(英文)：This research started for illuminating the essence of On Kawara as an international artist of Conceptualism in line with his method of the work. But after the death of the artist who had strongly refused to be seen "in the flesh" by his audience, the situation of researches has changed at all. Retrospective or peculiar exhibitions of his work with new interpretation were held, and also the data and testimonies are going to be opened gradually by his family and friends.

My research keeping the point of view to probe into the relation between language and image for human being, examines practically the discussions about form of books, postal matters and about the essays on creation. These advances from various angles are approaching the actual site of the artist's pursuit for art.

研究分野：美学・芸術諸学

 キーワード：芸術諸学 言語/形象 コンセプチュアル・アート メールアート アーティスト・ブック 絵画文法  
パーマネント・エキシビジョン メディア・通信技術

## 1. 研究開始当初の背景

(1) コンセプチュアル・アートの第一人者として、日本出身の美術家の中で最高度に世界的な存在といえる河原温についてはすでに広い範囲で多くの論が立てられてきた。しかし 1959 年に日本を離れやがてニューヨークを拠点とした、その出国の以前と以後とが充分につなぎあわされているとはいえない。

(2) 河原温の芸術において言語が重要な要素を占めることは論じられてきたが、海外の論者には特に、日本及び日本語との関係が考察されることが少なかった。また、或る種の評者は美術の領域を超えて言語の領域に踏み込まないために、以上の点はまだ充分に解明されているとはいえない。

(3) また、哲学的に論じられることは多くあっても、美術の領域を超えて言語の領域に踏み込まないために、河原温が絵画の歴史にもたらした「言語 / 形象」の関係についての革新的な手法の意義も、深く解明されているとはいえなかった。

(4) その理由の一斑は、作家が、その概念芸術としての方法の一環として、自身の姿をあえて公衆の前に現わそうとせず、自身の意図をあえて語ろうとしなかったためでもある。つまり、作家の実像は極度に秘匿されてきたといえる。

(5) ところが、この研究の開始 2 年目である 2014 年に河原温の死という事態が訪れ、作家によって統御されていた上記の研究の背景は本質的に変化した。河原温の死によって、遺族に託されていた当研究者への協力の意思が実行に移されはじめたからである。いいかえれば、研究開始当初の背景は、ニューヨーク定住以後の作者の実像がほとんど隠されていて、作家の実生活についての研究も禁じられていたということである。

## 2. 研究の目的

(1) コンセプチュアル・アートの中心的存在として、美術史上の革新という文脈で論じるだけではなく、むしろ絵画の本源性が出現した例として論じる。その根拠を、日本時代の河原温の思考や言説の中に確かめる。

(2) 彼の「日付絵画」に普遍性を獲得させたものの一つに、背景としての日本及び日本語との関係の更新がある。それは出国後も続いているものである。たとえば、日本を離れる直前の 1959 年に制作した「印刷絵画」と「日付絵画」との関係の問題は、ほとんど解明されていない。

(3) また、日本時代の河原温の、戦後美術批判の言説を解析することによって、河原の芸術と観客への独自の視点を読み取れる。そうすることで、コンセプチュアル・アートの萌芽がどのように胚胎されていたかを明かす。

(4) メキシコ時代の模索の解明を行なう。1962 年に制作された「接続法」という試作や、1964 年にパリで制作されたドロージング集など、ニューヨーク定住直前は、試行に満ちている。これらの解明は、河原温という作家の二度目の誕生を準備する時期の解明でもある。

(5) 河原温のコンセプチュアリズムを、本質としては視覚芸術性を離れて選び取った「言語 / 形象」関係への侵犯的作品行為として解明する。当研究者は 1995 年以来、「言語」と「形象」との本質的關係、「私性」と「共同性」という対概念、絵画における人称・時制などの文法構造などによって、河原温を論じてきた。これは「言語 / 形象」関係の究明が「文学 / 美術」関係の究明になると確信するためでもある。

(6) 河原温の芸術について解明するために、作品細部を制作手法的にも分析する。例えば、梱包のための箱の制作方法、ファイルのバインディング方法、刊行物の製本方法や、タイプライティングの方法、コピーの方法、ゴム印の使用法、制作の記録方法、などである。同時代の「アーティスト・ブック」や「メールアート」の多様性の中から鋭く逸脱しえた様態として研究する。

(7) 提供された作家の手元の制作記録により、その制作の背景にある時間的な関係や、人間関係や、シリーズ相互の連携が読み取れるようになった。ここから、これまで隠されてきた、作家と作品の実相、すなわち制作に即した作家の実存的なあり方を書き起こす。

(8) 本研究の直接の目的は、河原温の芸術における「言語 / 形象」の関係の究明であるが、同時に、その向こうに人類にとっての「言語 / 形象」の関係を究明しようとするものである。

## 3. 研究の方法

(1) 河原温の芸術を「コンセプチュアル・アート」「メールアート」「アーティスト・ブック」「書物史」「メディア技術史」などのカテゴリーとの関係から考察する。そのことで、河原温の構想がジャンルを超えた歴史性を持つ者であることを証ししようとする。

(2) 日本時代、メキシコ時代、ニューヨーク定住以後といった制作時期に即して考察する。そのような流離にありながら、日本及び日本語との関係がかえって緊密なものとなっていったことを確かめる。

(3) 日本時代の言説を収集すると、同時代の日本美術批判の中に、普遍的な芸術論が現れており、これを解析する。とくに絵画が観者に働きかける物質的な力の様態が明確に語られている点に、その芸術思想の確立を見定める。

(4) キャンバスにその日の日付の文字を描く「日付絵画」のシリーズのほかに絵葉書や電報をつかった「メールアート」形式のシリーズを持つ、言語との関係を考察する。そのためには、メキシコやパリに放浪していた時代における試行において、「言語」がどのように現れ、作用したかを見定める。

(5) ルーズリーフ・ファイルに切り抜きやコピーを綴じ込んだ記録形式のシリーズや、堅固に綴じられた古典的な本のかたちにおいて、その細部を調査する。このことにより、同時代の「アーティスト・ブック」と一線を画する点や「聖書」に関する意識や、類的な意識や類的な記憶への特異な思索を検証する。そこでは、言語の意味するものと意味されるものとの相互作用が激化している。このような観点から、「言語／形象」関係論を哲学・芸術学的に考察する。

(6) 河原温の死によって、遺族の協力が始まり、遺族や友人への取材、提供される証言・資料の解析という作業が加わった。これにより現れた、作品とは別の河原の手書きの記録を分析することによって、これまで隠れていた作家の意識、シリーズ相互の連携、同時代の人々との関係が新しく浮かび上がる。これらを確定する。

#### 4. 研究成果

(1) 作家の死(2014年6月)によって、研究状況・方法は一変した。まず2015年春にニューヨークのグッゲンハイム美術館で大回顧展が開催され、全貌が客観化された。また、続けてベルギーのヘントにて、デイト・ペインティングのスタートした一年(1966年)のみの絵画が集積され展示が行なわれた。これらの対照的な死後の展示を現地で調査した。

(2) 加えてご遺族の協力により、国際的キュレーター・カスパー・ケーニヒ氏や作家の友人であった美術家岡崎和郎氏、写真家奈良原一高夫人の奈良原恵子氏からの証言を得た。

(3) また、河原温と交流のあったドイツ在住の河原温研究者とのネットワークが結ばれた。

(4) もっとも重要な成果は、夫人の河原弘子氏からの証言を定期的に得た点である。ニューヨーク在住の夫人と一定のペースで、毎回1時間半程度のインタビューを開始した。これは最終的研究成果となるべき「河原温についての伝記的作品」という目標を共有してのものである。

(5) 研究・取材によって、河原温の作品の複線化されたシリーズ群に時間的な相互関係が刻印され、連絡づけられている点が確認された。そこで、時間的刻印と連関を丹念に拾いなおし得る一次資料(作家自身の手元控え)を入手し、ここから制作した行為を文章化する作業が開始された。すなわち、絵画行為の言語化である。この点は河原温の場合、解釈や想像によって歪められる余地のないものであるために、非常に大きな実績となるものと考えられる。

(6) 伝記的な記述と並行して、「書物論研究」講座を展開した(多摩美術大学芸術人類学研究所等の主催)。研究は二つの系を持つ。一つは日本近代文学における重要な存在(正岡子規、森鷗外)との間の精神的かつ方法的な連関を見出し、日本人の精神史の中に河原温を位置づけ直すという比較詩学的研究である。

(7) 「書物論研究」講座を展開した意義のもう一つの系は、書物史・印刷史・通信技術史とアートとの関係の探索において、「プライベート・プレス」、「アーティスト・ブック」、「メール・アート」との関連の中で河原温を捉えるというものである。ベルリンとフランクフルトで行なった通信技術博物館の調査を踏まえての講義などはこれにあたる。

(8) さらに2016年度は、まず20世紀のポスタル・アートの潮流を概観し、制作手法面から河原温の特異性を明確化しようとした。具体的には、アーティスト・ブックとコンセプチュアル・アートの交叉という観点から河原の《One Million Years》を分析した。

(9) 当研究者の造本デザイン面での仕事は、すでにその制作物を生前の河原温が購入していたという関係にある。そこで当研究者は研究成果の取りまとめとして、あるいはまた実作的な研究として、河原の《I GOT UP AT》のシリーズに応答するポスタル・アートの制作に入った。この成果はトロントの国際作家祭においての当研究者の造本展である「AIRPOST POETRY Book Design For One from One」展で展示した。また、講演と展示の双方にわたって河原温への批評的なオマ

ージュとしての活動の意図を示した。

(10) 河原温とゆかりの東京都現代美術館において、「美術館の使命」論を講義するにあたって、1995年に河原から直接、当研究者に与えられた大島清次『美術館とは何か』という書籍について再度読み込みを行なった。ここにおいての美術館論は、河原温の意図に例えば「パッセージとしての芸術論」と再解釈しうるものである、と考えられた。それは、観衆の絵を観る行為が、直接に次なる創造に結びつくという河原の日本時代の芸術思想が、1995年まで持続していたことを証し、かつどのように深く予見的なものであったかを示すことになった。

このようにして研究自体が多面化し、豊饒なものになりつつある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

平出 隆、「ON/KAWARA」, ON/KAWARA、第1号、via wwalnuts社、p1-p8、2015年

平出 隆、「私のティーアガルテン行 京都の偶然」, scripta、35号、紀伊國屋書店、p16-p23、2015年

平出 隆、「私のティーアガルテン行 18 郵便とともに」, scripta、38号、紀伊國屋書店、p16-p23、2016年

[学会発表](計11件)

平出 隆、「正岡子規「仰臥漫録」と河原温の芸術」, 多摩美術大学生涯学習講座+芸術人類学研究所研究会、子規庵(東京都・台東区)+プーザンゴ(東京都・文京区)、2015年4月9日

平出 隆、「河原温の二つの展覧会について」, Crystal Cage College、Paper Wall(東京都・国立市)、2015年6月20日

郡 淳一郎・前田 年昭・平出 隆、「オルタナ出版史はあります」, 多摩美術大学生涯学習講座+芸術学科書物設計ゼミ+芸術人類学研究所研究会、rengoDMS(東京都・千代田区)、2015年9月5日

平出 隆・郡 淳一郎、「本の美しさとはなにか」, かまくらブックフェスタ、由比ガ浜公会堂(神奈川県・鎌倉市)、2015年10月10日

平出 隆、「プライベート・プレス その手法と未来」, 北九州市立文学館特別展+西日本工業大学特別講義、発表場所 西日本工業大学(北九州市小倉北区)、2015年12月11日

平出 隆、「「森鷗外「委蛇録」と河原温の芸術」」, 多摩美術大学生涯学習講座+芸術人類学研究所研究会、プーザンゴ(東京都・文京区)、2016年1月16日

平出 隆、「ポスタル・アートを概観する」, 多摩美術大学芸術人類学研究所研究会、四谷ひろば(東京都・新宿区)、2016年5月28日

平出 隆、「葉書で哲学を贈る」, 多摩美術大学芸術人類学研究所研究会、四谷ひろば(東京都・新宿区)2016年9月17日

平出 隆、「本の生命とはなにか」, トロント国際作家祭、トロント国際交流基金(カナダ・トロント)、2016年10月27日

平出 隆、「パッセージとしての美術館」, 東京都美術館開館90周年記念フォーラム、東京都美術館(東京都・台東区)2016年11月3日

平出 隆・郡 淳一郎・前田 年昭、「本と手紙の戦い」, 多摩美術大学生涯学習講座+芸術人類学研究所研究会(シンポジウム) 四谷ひろば(東京都・新宿区)、2017年1月21日

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

平出 隆、「AIRPOST POETRY Book Design  
For One from One」(展示) トロント国際  
作家祭、国際交流基金トロント文化センタ  
ー(カナダ・トロント) 2016年10月4日  
~11月5日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

平出 隆 (HIRAIDE, Takashi)  
多摩美術大学・美術学部・教授  
研究者番号：90407825